

そう思いつつ目が重くなって来た

十時頃、めしを食い、鉛筆を休めて、ぼんやり、しばらく、コタツに座っていたが、僕の頭は、兄貴の事が心配でいっぱいだった。

僕は口にはあたかも心配してはなく、関係ないような話し方だが、内心、大変、兄貴の事が、心配であり、不安である。

僕が何をしたらって、仕方ない。

僕が試験するんじゃない。

兄貴がするんだ。  
僕には関係ない。

そう冷静には思うが、ただ僕が言えることは、「頑張るな」と励ます事だけ。それ以外、兄貴に今の僕は何も出来ない。

「合格してくれよなあ。」と一生懸命、兄貴の幸運を切望すれど、なぜか、僕の表情には出てこない。

居間のテーブルで、ぼんやりしている僕をおばあちゃんと幹夫が変な顔して見ている。

幹夫が暇そうなので、また、天気がいいので、何気なく、この間の絵の続きを思い出し、書きにゆく事にした。